1920年代アメリカの服飾　オンライン講座の概要

第一次世界大戦は、1914年6月28 日の、いわゆるサライェヴォ事件をきっかけとして、7月28日、セルヴィアに対するオーストリアの宣戦布告によって始まりました。当時の多くの人々は「祖国防衛」の統一目標のもとに銃をとり、前線におもむきました。そして、多くの婦人たちが、戦線に駆り出された労働者たちの穴をうめて、工場労働その他の近代的社会的分業に進出しました。こうして、大量の婦人が社会的進出を実現したとき、またもや婦人服に革命的変化がうまれました。つまり、スカート丈が床を離れたのでした。婦人服のスカート丈が床をはなれ、テーラード・スーツとよばれて定立し、1917年ころには普遍化して、珍しいことではなくなりました。

　1918年11月に第一次世界大戦は終わりました。この戦争をつうじて、アメリカの女性は大量に社会に進出しました。そして女性は、政治的にも男性と同等に参政権を獲得し、さらに経済的にも職業をもって独立する者がめずらしくなくなっていました。婦人の服装生活のうえにも直接に影響をもたらし、衣服の形や着方が変化しました。すなわち、1920年ごろまでにウェーストをゆるめた、いくぶん直線型のシルエットが流行していましたが、この傾向が強化されて、女らしさの特徴を故意にさけた衣裳デザインが全盛となりました。胸の脹らみを嫌い、腰を小さく緊め、スカートの丈を膝あたりか、それより上に短くして、男性をまねたいわゆるボーイッシュ・スタイルがあらわれます。このスタイルは1924年ころまで流行し、25年ころにいたって女性の衣服としての特徴を持ち始めますが、それでもなお、男装的スタイルを保っていました。スーツは大いに愛好され、短髪も、これと調和し、流行となりました。また、シルエットの変化に伴って下拵えのための下着にも特徴がまいえ、胸から腰にかけての直線型に整えるコルセットが普及しました。

　第一次大戦後のボーイッシュ・スタイルの傾向は1920年代の半ばころからさらに進んでギャルソンヌ・スタイルとよばれる形のものになります。男子風のシュミーズ（シャツ）に小さな蝶ネクタイを締め、短髪はポマードで固めたように整え、タキシード風の上衣を着用し、膝丈のショート・スカートをはき、流行の長いシガレット・フォルダーを形よく口に当てて、街頭で紫煙をくゆらせる、などというファッションが道行く紳士たちの目を引いたようです。一般的にいって、ギャルソンヌ・スタイルの特徴は、ショート・スカートとロー・ウェストの上衣でもありました。この場合、絹の肌色の靴下とハイ・ヒールが組み合わされたようです。

　男子と同様にズボンを着用することが目につきだしたのも。このころからであったと言えそうです。女子のズボン着用は、19世紀の半ば以来、強い弾圧をうけてきましたが、第一次大戦の間に、女子が工場へ進出したのを機会に、当時おこなわれていた作業服などをつうじて、男女共通の衣服があり得ることが理解されるにいたったものと思われます。女子の生活におけるビジネスやスポーツへの参加、および、1910年代のアメリカでは、すでに近代産業の花形となっていた自動車の出現は、衣裳モードの機能化を大きくおしすすめました。短縮されたスカートは、そのまま固定され、ズボンの

便利さも理解されてきました。しかしながら、ズボンが女子の日常服となるには、なお、大きな抵抗がありました。

　1929年のニューヨークにおける株式相場の大暴落をきっかけとして、世界大恐慌が勃発し、戦後世界経済の大破綻が曝露されました。このようなとき、アメリカで、職場の婦人を家庭に追い戻そうとする志向がうまれ、ここで、女らしさを婦人に要求する態度が働きはじめました。女子衣裳は大恐慌をきっかけとして再び、非活動的で優雅なものが尊重される傾向が強まりました。こうした環境のなかで、女子ズボンの本格的な普及は第二次世界大戦後まで引き延ばされました。